

二 自

〇 選

一 句

五 集

大谷
弘至

どぶろくをぐいと目覚めの水代はり

鮎舟昼餉をとりにもどりくる

生涯を舟にあづけて鮎とる

はるかなる月をたのみて残る虫

荒れやまぬ天地の秋を惜しみけり

口ふれていつものコツプ冬立てり

翁忌

また一人時雨の門をくぐりくる

わが道のしぐるることは疾く承知

来し方のそこにかしこに隙間貼る

一茶忌や口をついては南無阿弥陀

猫の髭漱石の髭雪がくる

風神と雷神の間年に行く

初鏡映るものみな花となれ

時空ありすこしはづれてちよろぎあり

御降りやゆけど誰にもゆき会はず

寝正月宇宙の果ての静けさに

亀戸天神

鯉ばかり色をもちけりみな枯れて

亀戸貧乏神神社

年神も貧乏神もこの路地に

餅喰うて相馬の春に駆けつけん

あの山の雪も下ろせよ手力男

媽祖は航海を守護する女神。長崎唐人街にいまも祀る

海に媽祖野に佐保姫や花の春

長崎句会発足

春風や媽祖に守られ船出せん

火を自在水を自在や紙を漉く

人類の記憶あつめて煮凝れる

生も死もこの煮凝りのごときもの

産んで肥え肥えては産んで寒卵

目の前を鯨がふさぎゐるごとく

伊予・風早は一茶ゆかりの地

風早は風を馳走や草の餅

術後

次の一歩佐保姫に背を押されつつ

供養せんわが身を縫ひし針もまた

舌出して足出して貝寄せてくる

巢が空けば別の鳥くるすぐにまた

あをきもの古巢に足して巢籠れる

襲はれてそれつきりなる古巢かな

殻固き栄螺となるや君の前

雪に来て影の大きな雉子かな

野遊びや野にうごくものみなあをく

鳥の糞恋に病みたる白さかな

星雲の燃え屑ならんもづくかな

やどかりの役に立たねど大鋏

太陽も月もつちふる向う側

ふるさとや降りくるつちを踏み固め

罪一つ被り甘茶を灌ぎに来

波白くいくつ砕けて月日貝

乗つて来し波はいづこへ桜貝

いざ刈らんもがく羊を股ばさみ

空をゆく燕のごとくきびきびと

かの憎き高浜虚子の忌なりけり

口あけて鳥となるや鳥貝

桜貝けふの終はりの波一つ

たけの子も出でて参るや御忌詣

念仏の力となれや草の餅

人の世を暖かくせし人の忌よ

御忌やいま遅れおくれて花ひらく

念仏の染みる一葉も柏餅

島一つはるかに据ゑて夏炉かな

樺太はかの日のままに夏炉かな

駆けつけに味醂召されよこの暑さ

葎切に眠るがごとく大河あり

夏木立どこまで来ても故郷とほく

菖蒲湯を出て赤鬼のごとくなり

木々やいまいよいよあをく蜻蛉生る

赤いやもり青いやもりを連れてくる

うごくたび家みしみしと冷奴

蚊柱を洩れ出て別の蚊柱へ

くちなはを払ひはらひつ国造る

涼しさや水は走りて比叡より

唐崎

名の松に負けじと張るやヨツトの帆

いにしへの湖族のごとく藻刈かな

神となることを拒みてはんざきに

太陽が我を眠らすハンモツク

日本を灼いては蒸していま西日

日がうごくき影がうごくくや葦簀なか

秋めくやもやしにのこる豆殻も

それぞれに戦後や雲の峰

蓮うごくはるかに星の生るるとき

宇宙より一滴の水蓮うごく

灼熱の荒野のかけら鷹の爪

湖北菅浦須賀神社・淳仁天皇御陵

いざ共に裸足で神の御前へ

陵守にして初鴨を撃ちに出る

爽やかに鳶を抜き去りゆく舟ぞ

さきがけて鮒のもみづる国ならん

水墨の淡海に色やもみぢ鮒

ついとゆく鮒に艶ありもみづれる

はつ秋の波は近江をゆきめぐる

仏性の鮎も鰻もみな鯖びて

あの世では喧嘩するなよ大文字

命みな消し炭となり涼新た

かなかなや仏彫るにも屑が出て

叩くたび空に星ふえ鉦叩

唐へゆく船もあるらん不知火に

文明は滅びて石に石叩

もろこしやマグマに揺られ我ら住む

みみず鳴くここも誰かの終の家

鮎が錆び月が錆びゆく今宵かな

月錆びるごとくに錆びて鮎の腸

製作…古志社

公開…二〇一六年九月一日

初出…「古志」二〇一五年一月号（十二月号

著者略歴

大谷弘至（おおたにひろし）

一九八〇年、福岡県生まれ。「古志」主宰。句集『大

且』（角川学芸出版）。